

平成29年度 自己評価計画に係る結果と分析・課題について（中間評価）

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	備考	7月結果	アンケート等からの分析と課題
1 生徒指導の方針・基準に一貫性のある協力体制のもと、基本的な生活習慣を定着させるとともに、規範意識の高揚を図る。	① 挨拶を含めた所作の指導を、学校生活の中で行う。	生徒指導課各学年	挨拶ができると自覚している生徒の割合は80%を若干下回る状況である。 今年度は、従来の挨拶運動を継続するとともに、友人間でも挨拶ができるようにしていく必要がある。	【成果指標】 来校者・教職員、地域の方、そして友人・クラスメートに明るく元気な声で挨拶・お辞儀等ができる。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が、 A 85%以上 B 80%以上85%未満 C 75%以上80%未満 D 75%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)	(79.7%) (C)判定	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で79.7%となっている。1年生を昨年度と比較すると1割程度挨拶をしている生徒が多い。(H28:71.6%→H29:81%) 今後は、職員の率先垂範はもとより、生徒会や運動部の生徒が中心となって積極的な挨拶を心掛け、学校全体へ浸透させていく。
	② 望ましい服装容儀や規範意識の向上に対して全職員が積極的に指導にあたる。	教頭 全職員	規範意識に若干欠けたり、服装の乱れがある生徒が少数存在する。それに対して8割程度の教職員は積極的に指導を行っている。	【努力指標】 積極的に生徒への声かけを教員が協力して行っている。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 A 95%以上 B 85%以上95%未満 C 75%以上85%未満 D 75%未満	C・Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (教職員アンケート)	(88.2%) (B)判定	教員の自己認識では9割弱が声かけをしているが、実態としてはまだまだ向上の余地がある。
	③ 規則正しい生活習慣と機敏な行動を確立するよう指導することで、遅刻の減少に努める。	生徒指導課 教務課 各学年	生徒とのきめ細かい面談、保護者との密接な連携により継続的に指導をしたところ、遅刻者数は対前年比で11.7%減少した。今年度は授業間遅刻を減少させることにも注力する必要がある。	【成果指標】 規則正しい生活習慣が身につく、1年あたりの遅刻人数を20%以上減少している。	1年あたりの遅刻人数が、 A 20%以上減少した。 B 15%以上減少した。 C 15%未満の減少であった。 D 減少しなかった。	C・Dの場合、指導の方法を再検討する	月ごとの集計記録を整理して、前年度の年間総合計に基づいて評価する。	(72.1%) (D)判定	1・2年の遅刻者数が、3年と比較して2倍となっている。また、3学年ともに、遅刻10回以上の常習者(1年4名62回、2年2名35回、3年1名30回)がおり、遅刻常習者の指導が遅刻者数減少に向けた課題である。
	④ 全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	生徒指導課 全職員	いじめ問題対策委員会を毎週開催し、生徒の情報を共有する。いじめの兆候がある場合には、速やかに対処している。	【成果指標】 「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が多い。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	C・Dの場合、指導の方法を再検討する	年間8回調査する。 (生徒アンケート)	(99%) (A)判定	スマートフォン等の普及により、自分本位のコミュニケーションが原因のトラブルが多く見受けられる。今後も、いじめ対策委員会やアンケート結果等の情報を共有し、速やかに対応する。

		⑤	ゴミの分別を通して、環境美化の意識が向上するよう指導する。	保健厚生課 全職員	生徒自身ではゴミの分別ができていないという認識をもっているが、現実には十分に分別されていない状況もあり、その乖離を解消するための意識改革と継続的な指導が必要である。	【成果指標】 環境美化に努め、ゴミを正しく分別できる。	ゴミを正しく分別できていると考えている生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)	(96)% (A)判定	一般社会の中でもゴミの分別の意識が高まっていることで生徒たちの分別意識はある。ただ、プラゴミと燃えるゴミの分別が分からない状況のものもあり、常日頃、呼びかけ、指導していきたい。
2	教育活動全般をとおして、生徒に自信と一体感を持たせる。	①	個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自分に自信を持たせ、希望する進路を実現するよう努力させる。	進路指導課 3年学年会 各教科	28年度の国公立大学合格者数は1名であった。進路指導課と学年・教科が進路指導について密接に連携することにより、一人ひとりの生徒の希望を実現させ満足度を一層高める必要がある。	【成果指標】 国公立大学に現役で3名以上合格している。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A 5名以上 B 3~4名 C 2名 D 1名以下	Dの場合、目標設定の検討、指導方法等を検討する。	最終進学状況の調査で評価する。		
						【成果指標】 就職希望者を11月末までに100%内定している。	11月末の就職状況において、就職希望者の内定率が、 A 100% B 95%以上100%未満 C 90%以上95%未満 D 90%未満	C・Dの場合、目標設定の検討、指導方法等を検討する。	11月就職状況の調査で評価する。		
		②	遠足・球技大会・鶴翔祭・手取川歩行・式典等の学校行事を通して、自信・一体感を育成する。	特活課 総務課 各学年	学校行事は、クラス・学年の横のつながりや、先輩・後輩の縦のつながりを深める絶好の機会であり、鶴高生としての一体感を育むこともできる。より一層積極的に参加することが望まれる。	【成果指標】 本校の学校行事が、生徒の自信と一体感につながっている。	学校行事を通して自信・一体感を持つことができたと感じている生徒の割合が、 A 80%以上 B 75%以上80%未満 C 70%以上75%未満 D 70%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)	(70.6)% (C)判定	行事に対して生徒が自信を持てるような取り組み方を促し、全校生徒で何かを成し遂げるといった達成感を生む活動が必要である。
		③	地域とともに歩む学校として、生徒・教職員・保護者が一体となり地域の清掃や行事などのボランティア活動に進んで取り組む。	特活課 総務課	地域ボランティアに取り組んでいるが、一部の生徒の活動に止まっている面がある。より多くの生徒にボランティアの意義を理解させるとともに、活動に参加できる手立てが必要である。	【成果指標】 教職員、生徒ともに積極的にボランティア活動に参加する。	学校全体を通して、部・委員会・各課でボランティア活動に参加した合計回数が、 A 55回以上 B 40回以上55回未満 C 30回以上40回未満 D 30回未満	C・Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	12月に部顧問・各委員会・課の先生方に参加回数を聞く。		
④	生徒の部活動に対する充実感、達成感を高めるとともに活性化を図る。	特活課	部活動を通じて生徒は様々な経験をし人間的に成長している。より多くの生徒が部活動に対して意欲を持って取り組めるよう指導の工夫が必要である。	【成果指標】 生徒が部活動に対して意欲を持って取り組んでいる。	部活動に対して意欲を持って取り組んでいる生徒の割合が、 A 85%以上 B 80%以上85%未満 C 75%以上80%未満 D 75%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)	(82.1)% (B)判定	生徒は原則部活動に所属することになっている。より一層生徒が意欲を持って取り組めるような工夫が必要である。		

3	授業のユニバーサルデザイン化を推進し、生徒がわかる喜びや学ぶ意義を実感できるように努める。	①	様々な背景や問題を抱えた生徒を理解するために教員が連携できる体制を整え、適切に支援できる能力の向上を目指す。	教務課 各教科 教育相談室	教員は、個人面談等を通して生徒理解に努めている。様々な情報を共有しつつ一層の生徒理解や学習指導の質的向上を目指す必要がある。	【努力指標】 教職員は個々の生徒理解に努めた上で、学習指導を行う。	個々の生徒に応じた指導内容や分かりやすい授業づくりに取り組んでいるという教職員の割合が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	C・Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (教職員アンケート)	(73.5)% (D)判定	教員による生徒理解が深まっているが、生徒がさらに授業に興味関心を持ち、主体的に学習に励むことができるよう一層工夫していく必要がある。
		②	教科指導研究、公開授業を充実し、授業力の向上を図る。少人数であることを活かした効果的な授業を行う。	教務課 各教科	少人数に応じた習熟度別授業や選択授業を実施している。授業の中で生徒が知的刺激を受け、自己肯定感を高めることができるよう授業の工夫を重ねる必要がある。	【満足度指標】 習熟度別や選択授業が、生徒の学習活動に対して効果的に実施されている。	自分の理解度に応じた充実した授業が行われていると感じる生徒が、 A 95%以上 B 90%以上95%未満 C 85%以上90%未満 D 85%未満	C・Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)	(84.7)% (D)判定	生徒一人ひとりの実情に応じてきめ細かい生徒の習熟度の把握に努め、それに合った授業をさらに工夫していく必要がある。
4	家庭学習時間や読書時間の増加を図り、授業内容の定着と国語力の向上を目指す。	①	きめ細かく面談を重ねることで、学習意欲を向上させ確かな学力の育成を図り、将来の目標設定にもつなげていく。	各学年 進路指導課	なかなか自分の将来の目標が設定できないため、具体的な取り組みに結びつかない生徒が多い。進路目標を明確にさせるため、また授業を大切にすることを意識を持たせるため、きめ細かい個人面談を行う必要がある。	【努力指標】 生徒との個人面談を実施して、生徒の進路意識・目標を高める。	生徒一人ひとりとの個人面談回数が、 A 7回以上 B 6回 C 5回 D 4回以下	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	年度末に調査する。		
		②	家庭学習調査を行い、その状況を分析することで家庭学習の習慣を身につけさせることにつなげる。	進路指導課 教務課 各学年	家庭学習の必要性を自覚し、取り組んだ生徒は41.7%であり、未だ定着しているとは言えない。画一的な指導ではなく一人ひとりに応じた課題等を与え、自ら進んで学習に取り組む姿勢を身に付けさせなければならない。	【成果指標】 担任・教科担当・部顧問と連携し、文武両道を実践させる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A 70%以上 B 60%以上70%未満 C 50%以上60%未満 D 50%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	7月、12月に調査する。 (生徒アンケート)	(70.0)% (A)判定	一学期期末考査、一週間前の調査で家庭学習が0でない全員の延べ日数が1779日(2541日)であった。1週間全くしていない生徒への声かけが必要。
		③	学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組ませる。	教務課(図書担当)	昨年の図書室利用者数は延べ3943名であった。図書委員会の取り組みの活性化等により、読書の楽しさを生徒に伝え、豊かな言語文化に触れる機会を与えていく必要がある。	【成果指標】 様々な方法で図書室利用者数を増加させる。	年間の図書室入館者数が延べ A 4,100名以上 B 4,000名以上4,100名未満 C 3,900名以上4,000名未満 D 3,900名未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	年度末に集計する。		
5	地域全体への広報活動に加え、中学校とのつながりを強めるための活動を教員個々が実践する。	①	メール配信サービスの保護者登録数を増やし、学校行事や教育活動等をきめ細かく情報提供していく。	総務課	メール配信登録者数が昨年度87.0%とかなり増加したが、特に突発的な案内が必要とされる場合を想定するとまだまだ不十分であり、登録者数の増加が課題である。	【成果指標】 学校の様子を知らせる様々な配付物の通知メールを小まめに配信することで、保護者の利便性を高めて、登録数増につなげる。	年度末の保護者のメール登録数が、 A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	メール配信をする度に登録数が表示される。	(84.0)% (B)判定	全体(昨年87.0%) 1年88.6%(96.5%) 2年84.2%(76.5%) 3年78.9%(86.5%) 昨年と比べ低い状況、懇談等通じ未登録者に促す。

	②	中学生やその保護者に本校の教育活動をより理解してもらえよう、ホームページの内容を充実させる。	総務課	昨年度の年間更新回数は240回であった。タイムリーな更新の必要性は言うまでもなく、内容を魅力的なものにしていくことも必要である。	【努力指標】 ホームページを頻繁に更新して、鶴来高校の生徒たちの活発な活動とタイムリーな情報を発信する。	ホームページの年間更新回数が A 360回以上 B 300回以上360回未満 C 240回以上300回未満 D 240回未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	更新回数を年度末に集計する。		
	③	教職員一人ひとりが中学校・地域とのつながりを強めるために積極的に活動する。	教職員全員	中学校や地域との連携を強化する取り組みは、部活動等を通じて一部の教員に偏る傾向がある。今後は本校の様々な活動を広く深く理解してもらうためにも全教職員が取り組んでいく必	【努力指標】 教職員一人ひとりが積極的に中学校や地域と連携する活動を実践している。	中学校・地域とのつながりを強める活動ができたと思う教職員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C 60%以上70%未満 D 60%未満	Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。	12月に調査する（教職員アンケート）		